

内モンゴルにおけるチベット仏教寺院の復興とその社会的機能

——フレー旗三大寺を中心に——

英 荀

Yingtao

非文字資料研究センター 2018年度奨励研究採択者
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】20世紀80年代から、中国全土において宗教活動が復活し、宗教活動の場所も復興された。内モンゴルにおいては、チベット仏教が再生され、チベット仏教寺院の復興や再建が始まった。また、チベット仏教寺院は文化資源としても開発されている。地方では寺院の修繕、増築や再建が大規模に行われている。さらに、チベット仏教寺院は地域の観光地になり、観光業の進展に応じて、寺院の年中行事も次第に復活してきた。このような背景を踏まえ、内モンゴル東部地域に位置するフレー旗の三大寺を事例として取り上げた。フレー旗はチベット仏教を由来する地域である。チベット仏教寺院の僧侶はフレー旗の政治の権力を持ち、政治と宗教を共に管理するようになっていった。このように、チベット仏教寺院の僧侶は宗教者であり、政治家でもあった。そして、三大寺は、その政治権力と宗教権力を行使する中心地であった。

本論文では、三大寺の復興と現状を明らかにし、三大寺の復興要因を明確にする。さらに、三大寺が現代社会に果たしている機能を考察するものである。

Revival of Tibetan Buddhist Temples in Inner Mongolia and Their Social Functions

—— With a focus on the Three Great Temples of Hure ——

Abstract: Since the 1980s, religious activities have regained momentum across China, accelerating the reconstruction of key sites for such activities. In Inner Mongolia, for instance, the revival of Tibetan Buddhism has triggered restoration and reconstruction of Tibetan Buddhist temples, which are also being developed as cultural assets. In local regions, large-scale works of restoration, extension or reconstruction of temples are being undertaken. As Tibetan Buddhist temples become popular tourist destinations in the region, the temples' annual events and rituals are also reviving. With these trends in the background, this paper focuses on the Three Great Temples of Hure in the eastern part of Inner Mongolia. Tibetan Buddhism is deeply connected with the origin of the Hure Banner, and priests at Tibetan Buddhist temples gradually gained political sway in this region. Involved in both politics and religion, Tibetan Buddhism priests were politicians as well as clerics, and the Three Great Temples were their bases for exercising political and religious authority.

This paper clarifies the factors behind the revival and current situation of the Three Great Temples and considers the functions they now serve in modern society.

はじめに

内モンゴルで、チベットから伝来した仏教が信仰されていることは、周知のことである。モンゴル人はチベット仏教のことを「シラン・シャシン」(黄教)あるいは、ラマ教という。またチベット仏教寺院のことを、ラマ廟と呼び、モンゴル語で「スム」ともいう。チベット仏教は、モンゴルに早い時期に伝来している。内モンゴルに伝来したのは、16世紀の後半であった。チベット仏教の布教のため、モンゴルの各地にチベット仏教寺院が建てられた。そして、多くのモンゴル人が、チベット仏教の信徒になった。19世紀の内モンゴル地域には約1200軒の寺院があったという(Walther Heissig 1998)。その後、中国の政治変動や政治運動により、内モンゴルにおけるチベット仏教は衰退していった。

改革開放後、中国の宗教政策の緩和により、民衆の諸宗教活動が復活し、宗教活動の建物も再建された。内モンゴル自治区において、チベット仏教は再生され、寺院の復興や再建が徐々になされてきた。それとともに、寺院の宗教活動も次第に復活していった。本論文では、内モンゴル東部地域のフレイ旗⁽¹⁾にある三大寺を調査対象として、三大寺の復興経緯と現状を明らかにする。また、スムの集まりや年中行事の観察、さらにラマ僧や民衆の聞き取り調査により、寺院の社会的機能を考察する。

チベット仏教寺院に関しては、長尾雅人(1987、1992)の研究成果がある。長尾は19世紀に内モンゴルの調査を行い、内モンゴル西部地域にあるチベット仏教寺院を訪ねた。彼は寺院の様子や年中行事などを調査し、モンゴル社会における寺院を多面的に論述した。さらに、Kürelša(1993、2010)、Čoyiji(1994)の研究もある。これらの研究では、内モンゴルのチベット仏教寺院が、さまざまな視点から紹介されている。その中でも寺院の歴史的変遷についての記述が主題をなしているといえる。

近年も、チベット仏教寺院に関するいくつかの学術論文が出されている。それらの論文は、主に歴史学、宗教学の視点からの研究である。寺院の変遷を中心とし、現状について論じられている。また、yandir(2011)、白莉莉(2015)は、チベット仏教寺院の復興と社会的機能の変化について論じている。この2人の研究の調査地域は、内モンゴルの東北地域と西部地域である。現時点で、内モンゴル東部地域における、チベット仏教寺院に関する研究は極めて少ない。

本論文では、これらの研究を踏まえ、内モンゴル東部地域のチベット仏教寺院に注目した。チベット仏教由来の地域と、その地域にある寺院の現地調査を行い、その復興過程と社会的機能を考察するものである。筆者は2017年8月10～13日、2018年3月18～21日、8月18～25日、9月23～25日の4回にわたり、通遼市フレイ旗を訪れ、三大寺の調査を行った。具体的には、三大寺におられる年配のダー・ラマ僧、住持ラマ僧、管理者のラマ僧および3人の青年ラマ僧から話を伺ってきた。その質問の内容は、主に三大寺が破壊された歴史と状況、および復興の経緯と現状に関する事項である。また、現在の三大寺の運営状況と、ラマ僧の現状についても調査した。さらに、寺院の子供ラマ僧たちに対する聞き取り調査も試みた。しかし、彼らからは、「何も知らない、話したくない」などと言われ、話を聞くことはできなかった。最後に、寺院のスムの集まりの日や年中行事を観察し、信者たちに聞き取り調査を行った。

I 調査地の概要

フレイ旗は通遼市⁽²⁾の西南部に位置する。東はホルチン左翼後旗、南は遼寧省阜新モンゴル族自治県と彰武県、西は奈曼旗、北は開魯県とそれぞれ隣接する。旗の面積は約4,716平方キロメートルであり、五つの鎮、二つのソム、一つの県と一つの国有林場から構成されている。総人口は約17万9千人、その中のモンゴル人は、約10万9千人である。旗所在地のフレイ鎮は、同旗の政治、経済、文化の中心地であり、「中国歴史文化名鎮」⁽⁴⁾の名称がある。

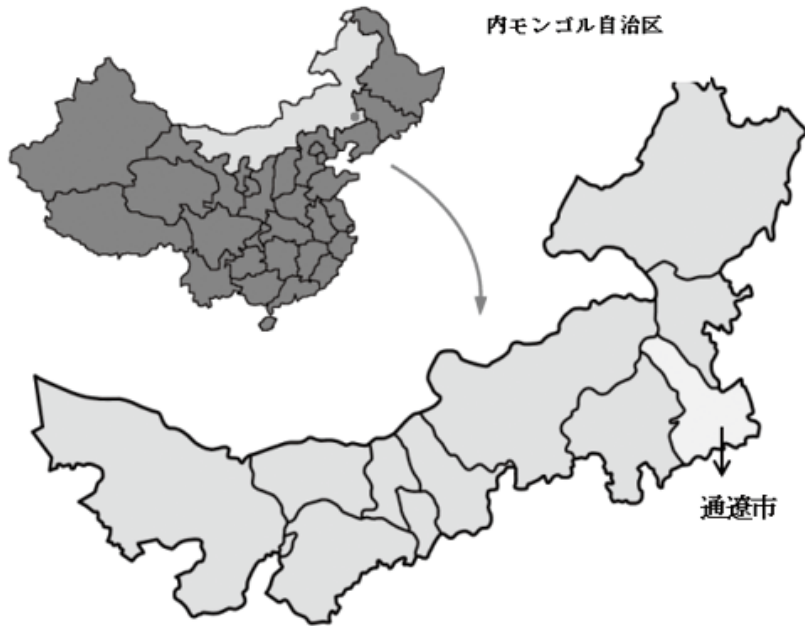


図1 通遼市の位置



図2 フレイ旗の位置

(1) フレー旗の歴史概況

かつてのフレー旗地方は、明朝と後金（清朝の前身）の戦いの場所であった。強大なる後金に従い、フレー旗地方は後金に属していた。そして後金の首都であったムッダン（現在の瀋陽）の管轄とされた。16世紀後半にアシン・シラブ⁽⁵⁾がモンゴルの西部地域から東部地域へチベット仏教を布教し、ハルチン地域（現在のフレー旗）まで来た。彼は青海省チベットのアムド地域出身のラマ僧であった。当時のホン・タイジ（満洲族、後金の2代目の皇帝）はアシン・ラマを受け入れ、盛京に居住させた。その後、盛京から法庫山（現在の遼寧省法庫県に位置する）に移住した。そのため、アシン・ラマは「法庫山マンジュシレ・ホトグト」と呼ばれるようになった。

天聰8（1634）年にホン・タイジは、フレー地域をマンジュシレ・ホトグトの領域と画定した。各モンゴル部落からラマ僧がフレー地域に派遣され、政府は毎年、千両銀の線香やろうそくの費用を支給した。

崇徳元（1636）年にマンジュシレ・ホトグトは入寂した。その後、ホン・タイジはマンジュシレ・ホトグトの弟であるナンソ・ラマ僧にフレー地域の宗教事務の管理を任せた。彼には「シレート・ダルハン・チョレジ」という名が授けられ、ジャサク・ラマ（管理係）とテムチ・ラマ（会計係）が設けられた。また、各モンゴル部落から、若干の牧畜民をフレーに移住させ、その属民とした。そしてハルチンモンゴルから、毎年食糧を提供することが決定された。この地域が「シレート・フレー」と呼ばれるようになったのは、「シレート・ダルハン・チョレジ」の名から由来したものである。

順治3（1646）年にナンソ・ラマが入寂した。その後、シブジャグンル・ラマ⁽⁶⁾がフレーに派遣され、「シレート・ダルハン・チョレジ」という名が授けられた。また「シレート・フレー・ジャサク・ダー・ラマ」の印章が与えられ、ジャサク・ラマの印務所が建てられた。この時期から、ジャサク・ダー・ラマがフレーの宗教と政治を管理し、基本的に「政教合一」の制度がとられるようになった。同時期にフレー地域では、チベット仏教寺院の建立が始まった。フレー旗はモンゴル地域に設けられた最初のラマ旗であり、内モンゴルにおいて唯一のラマ旗であった。つまり歴史上の「シレート・フレー・ラマ旗」である。

順治14（1657）年にシブジャグンル・ラマが入寂した。その後、ラブジャムバ・ジムバジャムソ、ラブジャムバ・ルブジャなどのラマ僧らがジャサク・ダー・ラマを務めた。雍正7（1729）年に清朝の政府は、ジャサク・ダー・ラマの世襲制を認めた。

1931年にシレート・フレー・ラマ旗の「政教合一」制度が廃止され、政治と宗教が分離された。「シレート・フレー・ラマ旗」は、行政機構のフレー旗になった。「政教合一」制度が行われ、ジャサク・ダー・ラマが23世まで世襲するという約300年の歴史が終わった。「シレート・フレー・ラマ旗」は、1934年に「満州国」から興安南省に、帰属が変わった。1945年にはジリム盟（現在の通遼市）に帰属し、1946年には遼吉省が管轄した。1948年には、再びジリム盟に帰属するようになった。

(2) フレー旗におけるチベット仏教寺院

フレー旗はチベット仏教布教の中心地であり、ラマ旗であった。第3代のジャサク・ダー・ラマのときからチベット仏教寺院が建て始められた。清朝の前半期はチベット仏教の最盛期であり、内モンゴルにあるチベット仏教寺院とラマ僧の数が最も多かった時代である。清朝期以降、内モンゴルにお

けるチベット仏教の勢力および影響は衰えてきた。同時に、シレート・フレー・ラマ旗のジャサク・ダー・ラマの権力も衰えた。これ以降、フレー旗や内モンゴル地域に寺院を建てることができなくなった。

中華人民共和国が建国される前のフレー旗には 35 軒の寺院があったと記録されている。その具体的なものを表 1 にまとめた。

表1 フレー旗のチベット仏教寺院

寺院名	建造年代	ラマ僧人数	所在地	備考
エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド	1649	200	フレー鎮	規模が第一の寺院
エヒ廟	不明	不明	フレー鎮	エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドに所属
スヨレ・ジョヒスト・ゲド	1670	100	フレー鎮	
阿由齊廟	1670	不明	フレー鎮	スヨレ・ジョヒスト・ゲドに所属
マイデレ廟	1670	不明	フレー鎮	同上
ダルハ廟	1670	不明	フレー鎮	同上
ウイン・テングル・スム	1655	50	フレー鎮	汗王廟ともいう
十八羅漢廟	不明	不明	フレー鎮	
ポヤン・バリレドーゴリッチ・ゲド	1742	53	フレー鎮	
老爺廟	不明	不明	フレー鎮	ポヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドに所属
壽因寺	康熙	120	格爾林蘇木	1922年に改築
関帝廟	1676	不明	フレー鎮	
山水神廟	光緒	2	フレー鎮	
東雅爾乃廟	不明	不明	フレー鎮	
西雅爾乃廟	嘉慶	20	フレー鎮	
チョイジャ廟	嘉慶	不明	哈日高蘇木	
ガブチュ廟	道光	35	哈日高蘇木	
三世仏廟	不明	不明	哈日高蘇木	
十八羅漢廟	不明	不明	額勒順鎮	規模が最小の寺院
三世仏廟	康熙	不明	フレー鎮	
チョレジ廟	康熙	1	哈日高蘇木	
老爺廟	康熙	1	哈日高蘇木	
チャハル廟	康熙	15	白音花蘇木	チャハル三大廟の主廟
ガルマ廟	康熙	20	白音花蘇木	チャハル三大廟の一つ
フソムト廟	康熙	15	白音花蘇木	チャハル三大廟の一つ
ソスアギ廟	康熙	15	白音花蘇木	
チョレジ廟	康熙	不明	白音花蘇木	
ラマゴー廟	不明	20	扣河子郷	
瓦房廟	不明	不明	瓦房郷	
四方廟	不明	10 余り	六家子郷	
新廟	不明	不明	六家子郷	1936年に改築
白廟子廟	不明	不明	奈林高蘇木	
龍王廟	不明	不明	先進蘇木	
フイス廟	1806	不明	忙漢蘇木	
ヒドン廟	1853	不明	忙漢蘇木	

出典：徳勒格、烏云高娃（2004）『内蒙古喇嘛教近現代史』と B・Süke（2010）Andai-yin Notuy Küriy-e Kusiyu-nu Teüke Soyul-un Tobçiy-a により、筆者作成

表1は中華人民共和国建国前の、フレー旗におけるチベット仏教寺院である。そのうちウイン・テングル・スム（吉祥天女神廟）、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド（興源寺）、ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲド（福縁寺）、スヨレ・ジョヒスト・ゲド（象教寺）などの大規模な寺院は、当時のジャサク・ダー・ラマの監督の下で建てられた。すなわち、政府が出資し、建立された寺院である。この他の寺院は、地方のモンゴルの人々が出資して建てられた寺院であり、民間の寺院であった。

中華人民共和国の成立後、「土地改革」、「四清運動」や「文化大革命」などの社会主義建設の運動が始まった。これらの運動は、内モンゴルのチベット仏教やチベット仏教寺院に、大きな打撃を与えた。まず、「土地改革」では、チベット仏教寺院の土地所有権がなくなり、寺院の資産は人民公社化した。また多くのラマ僧が、還俗させられた。さらに、「四清運動」や「文化大革命」の時期に、チベット仏教は「迷信」とされ、寺院の建築物や仏像などが、大量に破壊された。経典や仏殿の飾り物などの多くが、燃やされた。また、全てのラマ僧たちは寺院から追い出され、宗教活動も禁止された。このような一連の運動により、内モンゴルのチベット仏教は低迷期に入った。それは1947～1986年まで、約40年間続いた。

改革開放後、内モンゴルにおいて「全区ラマ教活動会議」が開催された。その会議で「占用したラマ廟を返し、宗教活動の場所を作り、ラマ廟を復興する」ことが決定した。1985～1995年の10年間に、国家が資金を集めて、内モンゴル地域に23軒の重要なチベット仏教寺院と49軒の一般寺院を修繕、改築した。修繕された寺院の中には、フレー旗のエヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドとボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドという2軒の重要な寺院が入っていた。エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド、ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドとスヨレ・ジョヒスト・ゲドは、フレー旗の三大寺と呼ばれ、旗の象徴的な建物である。本論文では、三大寺を調査対象とする。

II 三大寺の歴史概況

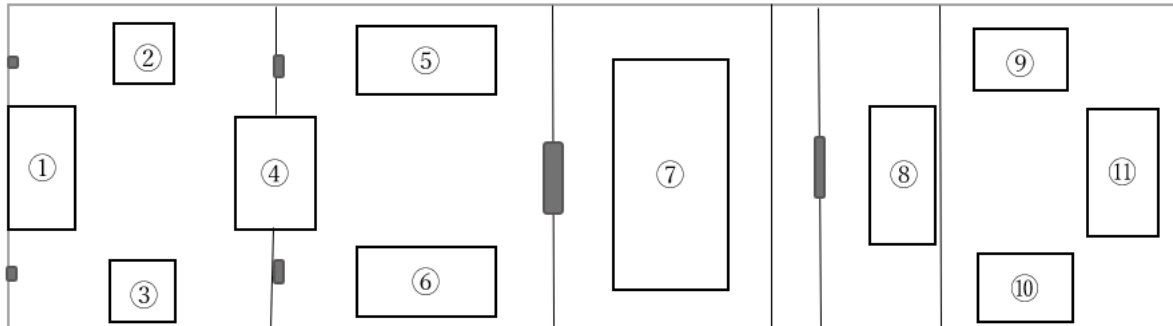
フレー旗は歴史上、内モンゴルに設置された唯一のラマ旗であり、約300年の歴史がある。清朝の時期には、数多くの寺院が建てられ、寺院群になっていた。それらの中でも、三大寺は政治、宗教の中心地であり、さらに経済、教育、医療などの中心地でもあった。

(1) 三大寺の概況

①エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド

第3代ジャサク・ダー・ラマのシブジャグンル・ラマは、清朝の皇帝に対し、フレー旗にチベット仏教寺院を建てることを上奏し、皇帝の許可を得た。そうして、この時期からフレー旗でチベット仏教寺院が建築されるようになった。エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドはフレー旗に建てられた最初のチベット仏教寺院であり、最大規模の寺院である。寺院は、フレー鎮の中央街路の北の傾斜地に位置し、1649～1650年まで、2年かけて建てられた。当時、ダライ・ラマには「ガドンチョイラン」というチベット語の名が付けられていた。また、皇帝には「エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド」という名が付けられた。寺院には、108人のラマ僧が常住していた。当時のジョソト盟・ジリム盟・ジョオダ盟の三つの盟から、500戸がフレー旗に移住させられ、寺院の属民になった。次に、1719～

1724年まで5年かけ、寺院が増築された。⁽⁷⁾80丈のソクチン・ドガン（本殿）が建てられた。1899年には、もう一度改築され、寺院は中国式とチベット式という二つの方式の建物になった。こうして、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドは、四つの庭、七つの廟から構成される約1万4千平方メートルの大規模寺院になった。それは「政教合一」のラマ旗の中心寺院であった。



①山門寺 ②鼓楼 ③鐘楼 ④天王殿 ⑤護法殿 ⑥羅漢殿 ⑦ソクチン・ドガン
⑧麻尼殿 ⑨西棟屋 ⑩東棟屋 ⑪エヒ廟

図3 エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドの平面図（筆者作成）

エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドでは、毎年旧暦の1月、4月、6月と9月に盛大な法会が行われていた。また、3年おきに1度、大規模な「マニ・ホルル」という法会を行っていた。

寺院は、財産として大量の土地、家畜や家屋などを所有していた。その土地と家屋を賃貸に出し、その賃貸料が寺院の主な収入となった。さらに、民衆の寄付金も寺院の収入であった。

②スヨレ・ジョヒスト・ゲド

スヨレ・ジョヒスト・ゲドは、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドの東側にあり、1670年に建てられた寺院である。ここにジャサク・ダー・ラマの職場とフレエ旗の政教権力を行使する印務所があった。そのため、スヨレ・ジョヒスト・ゲドは「王爺府廟」とも呼ばれた。スヨレ・ジョヒスト・ゲドは四つの廟と100余りの部屋から構成された。そのうち四つの廟以外の部屋を、ジャサク・ダー・ラマと印務所の職員が占有していた。

スヨレ・ジョヒスト・ゲドにチャム踊りの場があり、旧暦の1月と6月の14、15日にチャム踊り会が行われた。チャム踊りの他に、別の宗教活動は行っていなかったという。それは、スヨレ・ジョヒスト・ゲドが政教権力の中心地だったためであろう。⁽⁸⁾

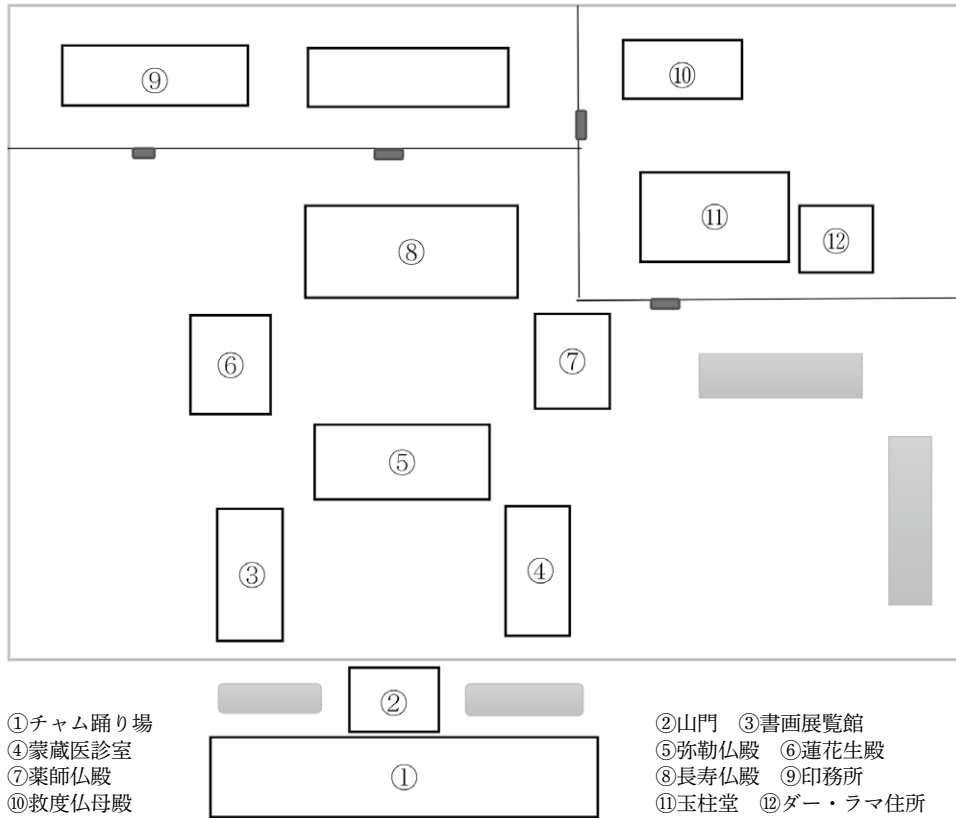
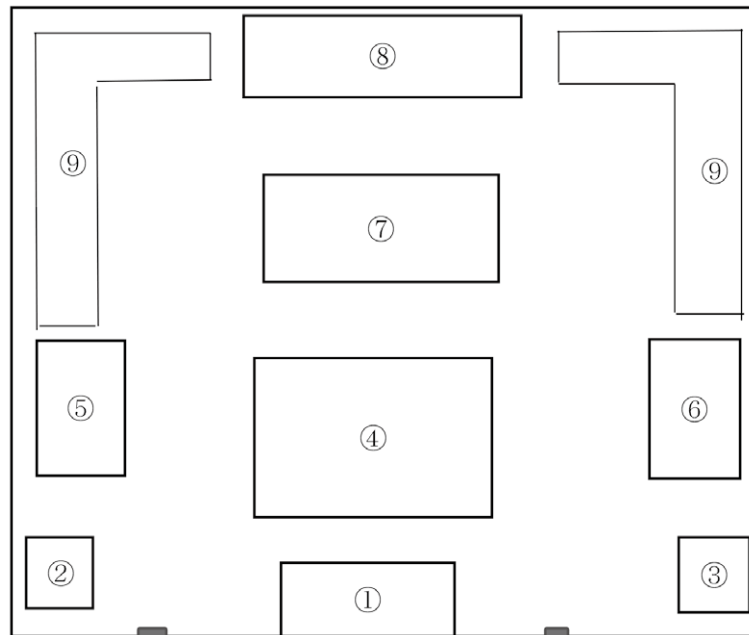


図4 スヨレ・ジョヒスト・ゲドの平面図（筆者作成）

③ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲド

ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドは、1742年に建てられた寺院で、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドの東南側にある。寺院は四つの廟から構成され、寺院のすぐ後ろには、舍利塔が建てられた。ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドは「シレート・フレーの副ジャサク・ラマとジャサク・ダール・ラマの法定継承者の住居であり、またシレート・フレー旗の財務機構の駐在地である」（哈斯朝魯2009）という。1926年、ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドにチョイレ・ラサン（哲学学堂）が設けられ、大勢のラマ僧が来るようになった。関連する資料によると、チョイレ・ラサンはフレーラマ旗において最初の学堂であった。

ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドにダ・ラマの職を設け、寺院を管理させていた。寺院では一般の法会の他、毎年3回のチョイレ法会が行われていた。また、三大寺の中では、ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドが最も豊かで、多くの財産と属民を所持していた。



①山門 ②鼓楼 ③鐘樓 ④ソクチン・ドガン ⑤護法神殿
⑥十八羅漢殿 ⑦三世仏殿 ⑧老爺廟 ⑨僧舎

図5 ボヤン・バリレド・ゴリッチ・ゲドの平面図（筆者作成）

（2）社会主義建設の政治運動時期の三大寺

内モンゴルにおいて「土地改革」運動が行われた際に、東部地域では「左傾」という誤った考えが現れ、チベット仏教に打撃をもたらした。「左傾」とは、フレー旗のチベット仏教寺院を「迷信」として扱う考えである。「左傾」は、ラマ僧らを還俗させて一般人にし、寺院の土地所有権を消滅させた。そして、建物を旗行政の各機構の駐在所にした。また、寺院の財産を無産者たちに分け与え、経典や法会の用具などは燃やされた。エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドに所蔵されていた一部の「カンジュル」、「ダンジュル」、スヨレ・ジョヒスト・ゲドの「ダンジュル」は燃やされたという。ある年配のラマ僧は、当時のチベット仏教の状況を次のように語ってくれた。

「1947年の冬、フレー旗で土地改革運動が始まり、寺院も巻き込まれた。寺院で読経していたラマ僧たちを「無労働の搾取者」、「人の血を吸う者」として扱い、地元に戻し労働者にした。寺院に所蔵されていた経典や、ラマ僧私有の経文などは、没収され燃やされた。これらは紙巻きタバコにされたり、経典の文字がないところに字を書いて利用されたりした。また、宗教儀礼に使う法衣を利用して、足をくるむ布にし、服や靴などを作っていた。寺院の中の石碑なども、壊された。信者らは還俗させられたラマ僧を家に招き、読経させることもあったが、ラマ僧は恐れて行かなかった。ラマ僧たちは心の中で黙読⁽⁹⁾していた」。

このように「土地改革」運動中には、三大寺も大きな破壊に見舞われた。中華人民共和国建国後、内モンゴル東部地域の「左傾」の誤りが是正された。チベット仏教に対しては、寺院の土地や財産を

返し、ラマ僧らを寺院に戻し、宗教活動を復活させた。しかし、その後「人民公社」運動が行われ、寺院の土地や資産などは人民公社化され、チベット仏教は再び打撃を受けた。

政治運動は絶えることなく、1960年代からは「四清運動」と「文化大革命」が行われた。この時期にチベット仏教は「封建主義の残り物」、「封建の迷信組織」として扱われ、寺院は大きな破壊を受けた。フレー旗において、三大寺のエヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドは中心寺院だったため、最初の破壊の対象になった。その様子を、年配のラマ僧は次のように話す。

「エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド寺院の中の石獅、石像や石碑など、全てが破壊された。また仏殿内の仏像、供物、⁽¹⁰⁾経典、法事用具、ホレロ（転経銅）、飾り物および屋根の上の彫像、風鐸などは「四旧」とされて壊された。スヨレ・ジョヒスト・ゲドの山門、一つの仏殿が破壊され、ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドの仏殿の仏像が破壊された。ラマ僧らは寺院から追い出され、ダー・ラマたちは激しい批判を受けた。「宗教活動は非合法」とされ民衆の信仰は禁止された⁽¹¹⁾」。

その当時の運動で、三大寺のエヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドは、大きく破壊され、スヨレ・ジョヒスト・ゲドの仏殿も破壊された。ただし、一般の部屋は、そのまま残された。ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドの破壊は小規模で、寺院の建物はほぼ全て残された。

一連の社会主義運動の下、内モンゴル地域におけるチベット仏教は衰退していった。チベット仏教寺院は破壊され、各宗教活動も一切禁止された。

Ⅲ 三大寺の復興と現状

改革開放後、内モンゴルにあるチベット仏教寺院は修繕され、寺院として復興した。また宗教活動も復活した。フレー旗においては、三大寺のボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドから復興活動が始まった。そしてエヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドとスヨレ・ジョヒスト・ゲドも次第に復興していった。

(1) 三大寺の復興

内モンゴル自治区の宗教活動に関する政府の文書には、フレー旗において三大寺のボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドを修繕し、宗教活動の場として復興することにしたとある。フレー旗の宗教局は、現地に関係する宗教者や民衆の意見を集め、1986年から寺院の修繕活動を始めた。まず、1986～1989年まで3年かけて寺院を修繕し、完成した寺院は1989年に公開された。この復興活動について、2018年8月のダー・ラマ僧の聞き取り調査を基に、次のように整理を行った。以下は、その内容である。

最初に、ソクチン・ドガンを修繕した。建物の外部から修繕したため、公開するまで廟内に、仏像も設置していなかった。1988年に行政側の人物がダー・ラマ（現在のダー・ラマ）の家を訪問し、「宗教は自由になった。あなたは宗教の学者だから、寺院に戻り読経していい。また寺院に居住してもい



図6 三大寺の位置図

い」と共産党の宗教思想を宣伝し、元のラマ僧たちを寺院に呼んだ。また、フレー旗にいる多くの元ラマ僧に連絡し、寺院に呼び戻した。当時、約30人のラマ僧が集まったという。

1988年旧暦の6月1日に初回の廟会が行われ、読経もなされた。その廟会では、毎月の1日と15日をスムの集まり（廟会）の日として、宗教活動を行うことが決められた。そのときの廟会の様子は次のようであった。「廟内には何もなかったので、ラマ僧たちは読経に際し、廟内の地面に砂を厚く敷き、その上に座って読経した。また、寺院には居住する場所や食事をする所がなかったため、ラマ僧たちは食事を自分で持ち込み、廟会は日帰りで行われた。寺院から遠い所に住んでいるラマ僧は、廟会の前日にフレー鎮の旅館あるいは親戚の家に泊まって寺院に通った」という。ダー・ラマ僧は「当時は廟会を行う環境や施設がなく、困難であったが、ラマ僧たちは寺院で読経することができ、うれしく思った」と語る。当時、政府は年配のラマ僧たちに一定の補助金を支給していた。

ポヤン・バリレドール・ゴリッチ・ゲドの復興には⁽¹²⁾デムチセレン・ラマ僧が非常に尽力したとされる。彼は1988年に寺院に入り、寺院の全てのことを管理した。まず、外地から職人を招き、正殿の両側にある10部屋を再建し、ラマ僧たちの泊まる家屋を建てた。また、青海省の塔爾寺から仏像の彫刻家を招き、各仏殿に仏像をつくった。ラサ、青海省塔爾寺、北京雍和宮にいるラマ僧の知人と連絡を取り、「カンジュル」、「ダンジュル」などに関連する経典、鼓などの宗教用具や飾り物を運んできたという。こうして、ポヤン・バリレドール・ゴリッチ・ゲドは、ほぼかつての姿を取り戻し、1989年に復興し、一般に公開された。寺院復興後には、周辺を緑化した。施主から殿堂の飾り物や、二つの石獅と二つのタヒリン・モド（旗竿）が寄贈された。それらは、寺院の山門の前に安置されている。写真1、写真2は、復興後の現在のポヤン・バリレドール・ゴリッチ・ゲドの山門と本殿である。



写真1 ポヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドの山門
(2018年8月 筆者撮影)



写真2 ポヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドの本殿
(2018年8月 筆者撮影)

次に、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドが復興された。1986年にポヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドと同時にエヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドの正殿の修繕が始まった。しかし、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドの破壊は大規模であったため、修繕には多くの時間がかかった。2008年には寺院にラマ僧が集まり、廟会を行い、一般に公開された。また管理層のラマ僧たちは別の寺院から派遣されている。2009年にフレー旗政府が、ジャミヤンワンチョッ・ラマをエヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドの「シレート・ダー・ラマ」⁽¹³⁾として招請した。同年、歴史的にも大規模な法会である「マニ・ホルル」⁽¹⁴⁾が行われ、大勢の人々が集まった。このように、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドにおける宗教活動は復活し、祈願法会や読経会などの行事も次第に復活していった。これらの宗教活動は、ソクチン・ドガン（写真3）を中心に行われている。ソクチン・ドガンは2階建ての建物である。エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドは三大寺の中心寺院で、入り口から81の階段を上ると当本殿に着くのである（写真4）。

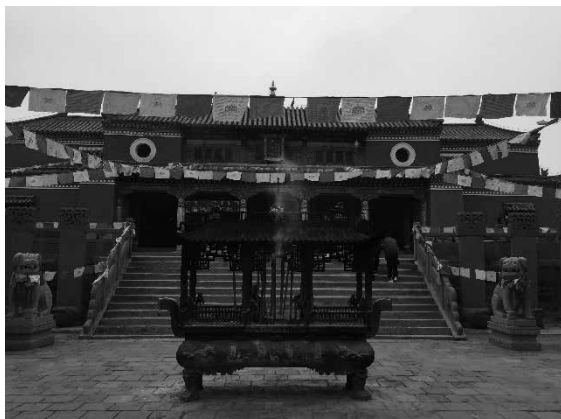


写真3 ソクチン・ドガン
(2018年9月 筆者撮影)



写真4 エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド
(2017年8月 筆者撮影)

エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドの復興とともにスヨレ・ジョヒスト・ゲドも一般に公開された。ただ、当時は修繕された仏殿に線香や、ろうそくが焚かれているだけであった。当寺院には、常住のラマ僧がおらず、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドのラマ僧が管理していた。寺院にあったチャムを踊るスペースが再建され、チャム踊り儀礼も復活した。しかし、まだ復活の条件が不十分

であったため、以前のように毎年2回行うことはできなかった。これまで、3回のチャム踊りを行っているという。寺院には、数多くの部屋がある。ただし、この建物は建築以来、数百年も経っているため、老朽化し危険な状態になっている。そのような大量の部屋の改修工事は複雑であり、現在も修繕中となっている。写真5は復興後のスヨレ・ジョヒスト・ゲドで、写真6は修繕されていない古い建築である。



写真5 スヨレ・ジョヒスト・ゲド
(2017年8月 筆者撮影)



写真6 スヨレ・ジョヒスト・ゲドにある古い建築
(2017年8月 筆者撮影)

三大寺のかつての姿を取り戻すため、2008年に行政が1億元を出し、三大寺の改修工事が始まった。これまでに19カ所の建物が修繕され、18カ所の建物が再建された。また、寺院の敷地の舗装工事を行い、寺院の周辺は緑化された (Kürelša 2010)。三大寺は2006年に「全国重点文物保护单位」に、2010年には「国家AAAA級の観光地」に認定された。フレー旗における三大寺は宗教活動の中心地だけでなく、有名な観光地にもなっている。

(2) 三大寺の現状

フレー旗の三大寺は次第に復興され、寺院の建物はかつての姿を取り戻している。しかし、ラマ僧の状況、管理組織、経済状況や宗教活動などには大きな変化があった。

①寺院のラマ僧たち

2018年3月の筆者の調査時には、三大寺のラマ僧の数は67人であった。ボヤン・バリレドール・ゴリッチ・ゲドに22人、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドとスヨレ・ジョヒスト・ゲドに45人のラマ僧がいる。現在、ラマ僧は家族があるため、寺院に常住しているラマ僧はいない。しかし、廟会の時期には必ず寺院に泊まり込む。また、遠方から来たラマ僧は寺院の僧舎に住み、寺院に通うという。次に衣食についてみてみよう。ボヤン・バリレドール・ゴリッチ・ゲドに入ると、ラマ僧たちが一般の法衣を着ている様子がみられる。一方、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドのラマ僧たちが法衣を着るのは、読経や法会の際であるという。食事は寺院でとる。主に米や小麦で作った麺類である。時には、お肉のおかゆを食べることもある。

年齢構成をみてみよう。年配のラマ僧は少ない。彼らは主にボヤン・バリレドール・ゴリッチ・ゲドにいて、寺院が復興された際に寺院に入った僧侶であり、以前もラマ僧であった。中年のラマ僧が比較

的多い。エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドが復興される際に、寺院に来た僧侶である。彼らはフレー旗出身であるが、大部分のラマ僧は外地の寺院に行き、仏教学を学んでいるという。三大寺の復興に伴い、地元の寺院に戻ってきた。青年ラマ僧たちはその弟子である。彼らは、年配のラマ僧や一部の中年ラマ僧の下で仏教学を学ぶ。また、仏教班（仏教学院のこと）に入学する。寺院の仏学班を卒業した後、内モンゴル仏教学院に進学し、ラマ僧の学位をとる。

②管理組織

三大寺には管理委員会があり、6人で構成されている。会長1人、副会長2人、事務管理者1人と会員2人である。寺院では、会長が住持、副会長が副住持と呼ばれる。この管理委員会の会長または住持は「シレート・ダー・ラマ」であり、三大寺の総管理者である。現在、三つの寺院では、二つの管理組織が存在している。以下、その管理組織を具体的にみる。

ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドは、自己の管理組織を持っている。寺院には住持、ダー・ラマ、ニーラブなどの職位が置かれている。次の表のとおりである。

表2 ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドの管理組織

職 位	人 数	職 務
住 持	1 人	寺院の総管理
ダー・ラマ	1 人	主に宗教活動の管理
ニーラブ	1 人	倉庫管理者
オンサト	1 人	先頭で読経するラマ僧

出典：2018年3月の聞き取り調査により、筆者作成

ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドの住持は三大寺の副住持であり、通遼市の仏教協会の副会長でもある。住持の話によると、行政が決定した大きな宗教活動の際には、三大寺の総管理に従うが、普段は寺院自身の運営方式に基づいているという。

スヨレ・ジョヒスト・ゲドは、自己の管理組織を持たず、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドに属している。寺院の管理員の話によると、寺院が復興された後、寺院を管理するための委員会が組織され、寺院にいくつかの機構が設けられたという。寺院の機構や管理組織を具体的に整理してみる。

表3 エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドの管理組織

管理組織名	人 数
管理委員会	5 人
消防安全管理	7 人
治安管理	5 人
民主管理	7 人
文物保護班	5 人
衛生防疫管理	5 人
学習指導班	5 人
法律知識指導班	5 人

出典：2018年3月の聞き取り調査により、筆者作成

表3のとおり、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドには、さまざまな管理組織が設けられている。各組織には、多くのラマ僧が配置されているが、その大部分は兼職である。実際には、15人のラマ僧が担っているのである。また、寺院における職位についてみると、次の表のようになっている。

表4 管理組織

職 位	人 数	職 務
シレート・ダー・ラマ	1人	住持で、総管理者
副住持	1人	
掌堂師	2人	
執事	2人	
事務主任	1人	
ニーラブ	1人	倉庫管理者
オンザト	1人	先頭で読経するラマ僧
管理員	1人	

出典：2018年3月の聞き取り調査により、筆者作成

エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドの管理組織は、ポヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドと比較すると多く設置され、職位も多く置かれている。それは、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドが、スヨレ・ジョヒスト・ゲドを含む、多くの廟などの建物やラマ僧たちを管理しているためである。

また、三大寺には仏教班（仏教学院のこと）が設置されている。仏教班は4年制であり、4年ごとに1回弟子を募集している。仏教学班を卒業したラマ僧たちは、当寺院に入ってくる。この仏教班は「内蒙古仏教学校・フレイ旗興源寺班」と呼ばれ、エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドが管理している。しかし、当寺院の管理者の話によると、行政が仏教班を停止するように指示したという。今後、青年ラマ僧育成がどうなるのかという問題が起きてくる。

③経済状況

寺院の経済は、寺院が主体ではあるが、地域経済にも関わる経済形態である。寺院経済には、寺院内部の経済構成や経営方法、収入源などがある。寺院の収入は、寺院経済を支える柱である。かつて、三大寺は非常に豊かで大きな財産を持ち、収入源も多様であった。改革開放後、寺院が復興された際には、政府がラマ僧や寺院に補助金や食料を提供していた。だが現在、政府の支柱はなくなり、概ね寺院独自の収入だけで寺院を賄っている。三大寺の主な収入源は次の三つである。

a、施主の喜捨や、寄付金による収入である。毎月のスムの集まりの日や法会期間に、施主が寺院やラマ僧に財物を寄付する。特に重要な法会の際には、他のチベット仏教寺院やラマ僧たちや、周辺の各地域から大勢の人々が集まり、寺院に大量の財物をもたらす。中でも女性信者が多く、約90%を占める。これらの女性は、現金の他に殿堂の飾り物や座布団などを作り、献上しているという。このように、多くの女性施主が、寺院の収入を保証しているといえる。

b、寺院が寄付を募って、集める収入である。寺院の改築や仏像をつくるなどで、大量に出費する際、

寺院は社会に向けて寄付を募る。寺院の管理者の話によると、各寺院には固定した施主がいる。施主の多くは商人で、毎月寺院に必要な食料や法事に必要な供物などを提供する。また、寺院の美化活動を行ったり、石獅や石製の香炉やタヒリン・モド（旗竿）などを献上したりしている。そして、寺院が資金を必要とする際には、多額の金を寄付する。これが、寺院の収入源の一つとなっている。

c、賃貸料としての収入である。寺院は、敷地内にある一つの建物（8の部屋がある）を、一般に貸し出している。この建物には、仏教法事に関連する商品の販売店、蒙医療クリニックが入居し、これらの店舗が寺院に賃借料を払う。さらに、スムの集まりの日や年中行事などで人々が大勢集まる際に、寺院のラマ僧が線香を販売する。つまり、寺院の経営事業による収入源である。

この三つの収入の他に、少額ではあるものの、政府からの補助金がある。寺院の改築や造仏の際に寺院が政府に申請し、補助金をもらう。また新年や重要な節日には、政府がラマ僧たちに米、小麦、食用油などの食料を支給している。これは寺院にとって、もう一つの収入である。ただし収入というより、寺院やラマ僧たちに対する、政府の支持・支援の表れともいえるだろう。

以上が、寺院の主な収入源である。一方、寺院の支出には、寺院の建物の修繕費用や宗教活動、日常生活のための費用などがある。その中で、建物の修繕が最大の支出である。以前は政府が修繕費用を出していたが、現在は主に寺院の収入に頼ることになった。宗教活動の費用は、日常の仏事に必要な物の購入や、年中行事、法会に掛かる費用のことである。寺院にとって、これも大きな支出である。例えば、2018年8月のマニ・ホロル（法会）には、約35万円の費用が掛かったという。その内訳は、マニ・ウリル（薬丸）制作の費用、1週間の信者とラマ僧たちの食事代、他の寺院から来たラマ僧たちへの謝礼金、などとなっている。また寺院の日常生活に必要となる費用としては、ラマ僧たちの食事代、寺院の水道料金や電気料金と暖房装置などの水道光熱費がある。これらの費用には、年間で約50万円、掛かるという。

最後に、寺院の入場券販売について述べておこう。三大寺の全てが一般公開された後、フレー旗の観光局が、三大寺の入り口の東側に入場券売り場を設置した。入場券の販売は、時期によって異なる。4月から11月末までを旅行シーズンとし、入場券は1枚50円で販売される。12月から翌年の3月まではシーズンオフで、入場券は販売されない。入場券販売について、ボヤン・バリレド・ゴリッチ・ゲドのダー・ラマは次のように話す。

「当初、ボヤン・バリレド・ゴリッチ・ゲドを一般に公開した後、毎月1日と15日のスム集まりの日に入場券（2元）を販売していた。当時は寺院の収入があまりなく、施主からの寄付金も少なかった。しかし、寺院の収入が増え、固定した施主が出現した後は入場券の販売を停止した。2010年以前のことである。その後、6年前に旗の観光局が入場券売り場を設置し、入場券が販売されるようになった。1枚50元であり、これは農民や信者にとっては非常に高い金額である。これに対して、寺院のラマ僧たちは反対の意見を表明したが、入場券の販売を阻むことができなかった。しかし現在、寺院に来る全員に入場券が販売されているのではない。我々ラマ僧に読経してもらい、病気の治療

などのために来た信者、およびフレー旗出身の人々は、入場券を買わなくてもよい。また、その入場券の販売で得られるお金は、寺院の財政には入っていない。観光局の収入である」。

このように、三大寺は文化資源として開発され、観光地となった。寺院やラマ僧たちの意見を取り入れずに、入場券は販売された。だが、この販売によって地方の観光局の収入は増加し、観光業の発展を促進する役割を果たしたともいえる。

④寺院の年中行事

三大寺が復興するに従い、寺院の年中行事も次第に復活してきた。現在、各寺院で行われる宗教活動は異なっているが、重要な活動はエヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドで行われている。聞き取り調査を基に、現在、三大寺で行われている重要な宗教活動を具体的にみってみる。

表5 三大寺の宗教活動

宗教活動	月 日	場 所
マンジャ・ホロル	毎朝	三つの寺院
スムの集まり	毎月1日と15日	エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲド
イルゲル・ホロル (祈願法会)	旧暦12月30日～ 翌年1月3日	エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド
オダチ・ホロル	旧暦1月8日	ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲド
イルゲル・ホロル (祈願法会)	旧暦1月15日	エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲド
ロス祭祀	旧暦1月25日	エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド
タレバ・ホロル	旧暦4月1～7日	エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド
オダチ・ホロル	旧暦4月8～15日	エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド
マニ・ホロル	旧暦7月8～15日	エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド
チャム踊り儀礼	旧暦7月15日	スヨレ・ジョヒスト・ゲド
ミンガンジュラ・ホロル	旧暦10月25日	エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲド ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲド

出典：2018年3月の聞き取り調査により、筆者作成

三大寺では、ラマ僧たちが毎朝8～9時に、各寺院のソクチン・ドガンで読経を行っている。これを「マンジャ・ホロル」と呼んでいる。表5をみると、毎月スムの集まりの日以外、寺院の重要な年中行事は旧暦の1月、4月、7月と10月に行われている。そのうち、旧暦1月15日の「イルゲル・ホロル」に、最も多くの人が集まる。その日は中国の元宵節であるため、各地域から人々が集まってくる。またフレー旗から約100人の警察官が来て、安全を確保する。「ロス祭祀」は水神を祭るもので、フレー旗の各チベット仏教寺院で行われる祭祀である。「オダチ・ホロル」で薬師仏の経文を読経し、「タレバ・ホロル」では解脱する経文の読経が行われる。旧暦4月を「ボヤンド・サラ」と呼ぶ。幸福をもたらす月という意味である。この月には、読経会が特に多い。旧暦7月15日のチャム踊りは、マニ・ホロルが終わってから行う行事である。「ミンガンジュラ・ホロル」は、チベット仏教ゲルク派の創造者の宗喀巴を記念する法会で、千本の法灯が捧げられる。また、エヒ・ヨゲン・バダラーゴ

ロッチ・ゲドで行われる「マニ・ホロル」は、三大寺において最大規模の年中行事である。これについては、次の事例として、具体的に述べる。

チベット仏教では、仏の誕生日や出家の日などの重要な記念日には、信者たちが寺院に集まる。そして、功德を積むために放生⁽¹⁵⁾が行われる。現在、寺院で行われる年中行事の他に、旗のオポー祭りや火の祭祀の際にも三大寺のラマ僧全員が集まり、読経するようになった。

【事例】マニ・ホロル

チベット仏教寺院において、マニ・ホロルは重要な法会である。この法会は観世音に関連するもので、観音の真言である「オン・マ・ニ・パト・メ・ホン」（梵語で、Om ma-ni pad-me hum と綴られる）の六字真言を口に唱える。マニ・ホロルはソクチン・ドガンで行われ、大勢のラマ僧や信者が参加する法会である。

かつて三大寺のマニ・ホロルは4年おきに1回挙行されていた。エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドのマニ・ホロルは2009年に復活し、今では毎年行われている。各地域、各チベット仏教寺院でマニ・ホロルを挙行する時期は、それぞれ異なっている。エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドのマニ・ホロルは、毎年旧暦7月8～15日に挙行されている。2018年8月の調査を基に、マニ・ホロルの状況を紹介しよう。

マニ・ホロルは、3段階に分けて行われる。

〈1〉準備期

マニ・ホロルの15日前から準備作業が始まる。まず、「マニ・ウリル」⁽¹⁶⁾を作る。ウリルとはモンゴル語で、粒の意味である。マニ・ウリルは小麦に「モンゴル・エム」（モンゴル薬の原材料）を混ぜて作る丸い形の薬である。かつてラマ僧は、マニ・ウリルを自分たちで作っていた。しかし、現在はモンゴル薬を作る現地の専門機関に依頼し、作ってもらっているという。マニ・ウリルを作りあげると、「ボムバ」という容器に入れておく。次に、寄付者の登録を行う。信者からの寄付を受け付け、名簿に登録する。以前は寄付者にマニ・ウリルを配給するためチケットを配っていた。このチケットを持っていない人は、マニ・ウリルをもらうことができなかった。だが、2018年には、マニ・ウリルのチケット配給は行われなかった。その理由を尋ねると「今年はマニ・ホロルの復活後の10周年だから、マニ・ウリルをもらいたい人全員に配る」との答えであった。

また、寺院の遠方から来る信者や、他の寺院から来るラマ僧には、宿泊所が用意されている。それを事前に準備しておく。さらに、ソクチン・ドガンにラマ僧たちの座席を設置し、法会期間に読経するラマ僧たちの順番を決定する。

〈2〉法会期

マニ・ホロルは旧暦7月8～15日まで、ソクチン・ドガンで行われる。ソクチン・ドガンの中央奥の祭壇に、マニ・ウリルが入っている「ボムバ」を箱に入れて置く。前には供物が置かれている。祭壇の前にはラマ僧たちが、2列に顔を突き合わせるように座る（写真7）。ラマ僧たちの座席を4列設置し、その後ろに、信徒の座る場が設置される。マニ・ホロルには、三つの寺院の、全てのラマ僧が参加する。2018年にはフフホトの大召寺から20人のラマ僧が来て、80人という大規模な法会になった。

マニ・ホルでは、「オン・マ・ニ・パト・メ・ホン」の真言を7日7晩、絶えず唱える。さらに、毎朝「イルゲル」（祈願）経を読経し、夜に「マッタール」（称赞）経を読経する。読経している途中、マニ・ウリルが入っている容器をラマ僧たちの頭の上で回す。マニ・ウリルが、ラマ僧たちの読経の力で、容器の中に増えていくといわれる。また、毎日夕方6時ころには、スム・エリゲホというソクチン・ドガンを周回する行事がある。まず、ソクチン・ドガンのドアの前にラマ僧たちの楽隊が2列に並び、2分ほど演奏する（写真8）。その後、ソクチン・ドガンから他のラマ僧たちと信徒たちが出てくる。次に、楽隊が先頭になり、演奏する。後ろに、一部のラマ僧と信徒たちがついて、ソクチン・ドガンを1周する。最後に、ソクチン・ドガンの3メートルほど前に敷かれた赤いじゅうたんの上でラマ僧たちが読経しながら、ソクチン・ドガンに向かって拝む（写真9）。それに従い、信徒たちも跪拝する。ラマ僧たちの読経が終わると、この行事は終了となる。スム・エリゲホを行うと、功德が何倍にも増えるといわれる。

〈3〉 終了期

旧暦7月15日の朝6時に、読経が終わる。その後、「ボムバ・シュルゴホ」という行事が行われる。マニ・ウリルを入れるボムバは銅で作られている。五色の幡で飾り、上部に赤と緑の宝石を嵌め込んだ飾り物のカバーがある。ボムバの口は、黄色の布で覆われている。ボムバの上には、観音菩薩像を乗せて置く（写真10）。

ボムバ・シュルゴホ行事では、前で4人のラマ僧がボムバを担ぎ、後ろにシレート・ダー・ラマと他のラマ僧たちがつく。そしてソクチン・ドガンを1周する。ソクチン・ドガンの前には、ボムバの置き場（写真11）を作る。ラマ僧たちがソクチン・ドガンを1周した後、その置き場にボムバを置き、ボムバ・シュルゴホの行事が



写真7 ソクチン・ドガンの中
(2018年8月 筆者撮影)



写真8 演奏するラマ僧たち
(2018年8月 筆者撮影)



写真9 ラマ僧が拝む様子
(2018年8月 筆者撮影)

始まる。まずラマ僧たちがボムバの置いてある置き場の下へ、左から右へと潜り込んでいく。次に信者たちが潜り込む（写真13）。その際に、置き場の下にある箱にお金やジョラ（法灯）などを入れる。これは、「厄払いをし、長命で永らえる」という願いを込めたものである。ボムバ・シュルゴホの行事が終わると、ボムバをソクチン・ドガンに持ち込む。中のマニ・ウリルを取り出して、少しずつ紙で包む（写真14）。このとき信者たちは外で待ち、ソクチン・ドガンに入ることは許されない（写真15）。最後に、ラマ僧たちがソクチン・ドガンの中で読経する。2人のラマ僧が、信者にマニ・ウリルを分配する。信者たちは左の入り口から入り、右の出口から出ていく。マニ・ウリルを配り終わると、ラマ僧たちの読経も止み、マニ・ホロルは完全に終了する。

信者はマニ・ウリルを大切にし、家の仏像と共に祭ることが多い。これは、魔除け、厄払い、健康の保持に役立つといわれる。また、体調をくずしたり不思議な病気になったりしたときにも飲む。このようにマニ・ウリルは、信者たちにとって特別なものとなっている。

IV 寺院の社会的機能

かつて、三大寺は、フレー地域の宗教と政治の中心地であった。また、経済・教育・文化・医療など、地域のモンゴル人の生活を支える中心としての機能も果たしていた。ここまで三大寺の復興と現状を明らかにしてきた。次に寺院の社会的機能について考察していく。

(1) 宗教活動や文化活動の中心地

チベット仏教寺院は、信者にとって宗教活動の中心地である。信者は寺院に行き、焼香し、



写真10 ボムバ
(2018年8月 筆者撮影)



写真11 ボムバの置き場
(2018年8月 筆者撮影)



写真12 ラマ僧たちの姿
(2018年8月 筆者撮影)

仏を拝み、経典を読む。また放生を行い、厄を払い、家族の健康、幸福などを祈り、功德を積む。また日常生活で困ったときにも、寺院のラマ僧に頼ることがある。例えば、家族がいなくなった場合は、ラマ僧に済度の経典を読経してもらおう。そして仏像に線香をあげ、ジョラを焚く。不思議な病気にかかった際にもラマ僧に読経してもらい、家で仏像を祭祀する。諸事の日取りの良し悪しを、みてもらう人はさらに多い。

スムの集まりや年中行事の時期、寺院には多くの人々が集まる。聞き取り調査の中で聞き取った事例から、代表的な事例を一つ挙げておこう。

Aさん(80代、Wガチャー⁽¹⁷⁾の人)

「子供のころ(10代のころ)から、家族と一緒にスムの集まりに来ていた。当時は車を持っていなかったの、何日も歩いて来ていた。家はスムから遠く、交通も不便だったので、スムの集まりや法会に来るのは、ひと月に1回だった。家では仏像を祭祀している。スムの宗教活動が復活して以来、スムの集まりに来るし、各法会にも来ている。今は息子が車で送ってくれる。ラマ僧たちの読経(主に「イルゲル経」)を聞き、家族のために祈願する。子供たちは仕事が忙しいから、スムに来る時間がない。また、ここには同じガチャーやガチャーの近くの人々も来て、みんな知り合いになっている。現在、スムの集まりに来ることができて、うれしい。知り合いのみんなと会って話ができ、楽しい。普段みんなに会えないから」。

現在、寺院に集まる人々のうち、60歳以上の年配の人が、最も多い。多くの人が、Aさんと同じような話をしてくれた。その話から分かるように、寺院は年配の信者たちにとって宗教活動



写真13 ポムバ・シュルゴホ
(2018年8月 筆者撮影)



写真14 紙に包まれたマニ・ウリル
(2018年8月 筆者撮影)



写真15 外で待つ人々
(2018年8月 筆者撮影)

の場であるとともに、「同窓会」のような場ともなっている。また、寺院の前の広場には、多くの老人たちが集まって将棋を指したり、トランプ遊びをしたりする。

寺院のダー・ラマの話によると、寺院の広場では政府の諸宣伝活動が行われ、記念日には「アンダ⁽¹⁸⁾イ踊り」を踊る活動も行われるという。つまり、寺院の中では宗教活動が行われ、寺院の広場では文化活動が行われているのである。三大寺は、全国重点文物保护单位であり、その三大寺によってフレー鎮は「中国歴史文化名鎮」と認定されている。

(2) 地域発展を支える力としての寺院

スムの集まりの日に、寺院の外で集会が行われることがある。三大寺では、毎月2回のスムの集まりの日に集会が行われる。この日は集会の日とされている。場所は、三大寺の前にある大通りである。すなわち、毎月1日と15日に寺院でスムの集まりが行われ、信者が集まる。同時に寺院の前の大通りでも集会が行われ、多くの商人たちが集まってくる。集会では日用品、衣類、食料、乳製品、野菜類、子供用品および日常用具など、さまざまなものが販売される。また宗教活動に必要な線香やジョラなども販売されている。寺院と向かい合った大通りの傍らには飲食店や商店がある。このように、スムの集まりによって集会が出現する。このことは、スムの集まりに来る人々の生活要求に応じ、人々の生活に利便性を提供することになる。一方、販売者にとっては消費者が増え、市場の収入の増加につながる。こうして寺院により出現した集会は、商いや市場経済の発展を促進する役割を果たしていると考えられる。また、三大寺の年中行事の時期やスムの集まりの日は寺院周辺に多くの人が集まり、それとともに飲食業も繁盛するようになる。

現在、三大寺は観光地になっている。フレー旗の観光局は三大寺の広場の東側に建物を建て、寺院の入場券や観光者向けの記念品などを販売している。また、三大寺の観光ガイド業務も行っている。現在、三大寺は文化資源として開発されている。また、地域の観光業の発展に伴い、寺院の年中行事のチャム踊りなどが復活しつつある。

(3) その他

三大寺は現地の人々に対し、援助支援活動を行っている。エヒ・ヨゲン・バダラーゴロッチ・ゲドの管理者の話（2018年3月の調査）によると、寺院は当地の貧しい家に必要な食料、日用品などを提供しているという。また、現地の数名の大学生に対しても、必要な援助を与えている。三大寺では、数人の子供（10歳ぐらい）のラマ僧の姿がある。彼らの家庭環境をみると、家族がいない、あるいは家族に労働力がない、など非常に貧しい家庭環境の子供たちであった。そのため寺院に弟子として入れられたという。

以上の事例のように、寺院は、現地の人々の生活や学生の教育を支援し、悲惨な境遇の子供に安定した宿泊所を提供するなどの活動を行っている。つまり、寺院は社会の下層の人々の生活を支える役割を担っている。

おわりに

本論文では、内モンゴル東部地域に位置する、フレー旗のチベット仏教寺院の実態の考察を試みた。チベット仏教寺院の三大寺で実地調査を行い、文献資料と調査資料を合わせて、三大寺の復興と現状を明らかにした。また、寺院の宗教活動を観察し、寺院の現代社会における機能について考察した。

三大寺の復興経緯と現状から、寺院復興に関わる要因を次の3点にまとめた。

- ①国家の宗教政策である。改革開放後、「宗教自由」政策の実施により、諸地域の宗教活動が復活した。
- ②現地の人たちの宗教意識である。フレー旗は仏教文化の非常に濃い地域である。そのため、宗教活動の復活が強く望まれた。また、宗教者の寺院に対する期待も非常に高かった。
- ③地方の観光業の発展である。復興の初期における寺院修繕の目的は、宗教活動の場所を確保することにあった。しかし、その後になされた再建・修繕工事は、寺院を文化資源として開発することを目的とした。そして地域の観光化が進行し、観光業の再生に役立つことになったのである。

フレー旗では、宗教文化が現地の文化、習俗と融合し、人々の日常生活の中に新しい習俗を生み出した。寺院にお参りに行くことが人々の習慣になっている。当然、多くの信者にとって、寺院は宗教活動地であり、精神生活において不可欠な存在である。

一方、地域経済や市場の要求により、寺院におけるスムの集まりから集会へと、商業化が進んでいる。さらに寺院の年中行事も変化し、宗教本来の意義を失ってきた。こうしたことを背景に、現在の経済社会において、チベット仏教寺院と宗教者をどのように位置付けるべきであるかを今後の課題にしたい。

註

- (1) 内モンゴル自治区行政区画の一単位。
- (2) 通遼市（旧ジリム盟）は内モンゴル自治区の東北部に位置する地級市であり、総面積は59,535平方キロメートルである。総人口は313万9,153人（2010年の統計）。このうちモンゴル人は144万1,275人で総人口の45.91%を占め、中国のモンゴル人総人口の約25%を占める。通遼市は内モンゴルにおいてモンゴル人が集中した地域である。
- (3) 内モンゴル自治区行政区画の一単位。
- (4) 中国歴史文化名鎮は、中国の文化遺産保護制度の一つであり、国家級の歴史文化地区に対して制定される名称である。フレー鎮は2014年に国家文物局と建設部によって選定された地区である。
- (5) ダライ・ラマ三世の親戚で、ダライ・ラマ三世に「マンジュシレ」と呼ばれ、内モンゴル東部地域に伝教した最初のラマ僧である。
- (6) シブジャグンル・ラマは、当時の盛京にあった実勝寺のラマ僧であった。
- (7) 尺貫法の長さの単位。10尺、3.03メートル。
- (8) チベット仏教における仮面舞を踊る一つの儀礼である。
- (9) ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドの年配のラマ僧の2018年の聞き取り調査内容。
- (10) 打倒すべき四つの古いもの：古い思想・文化・風俗・習慣を指す。
- (11) ボヤン・バリレドーゴリッチ・ゲドの年配ラマ僧の2018年3月の聞き取り調査。
- (12) フレー旗三家鎮出身の人。8歳でラマ僧になる。チベットのラサの寺院で5年間、仏教学を学び、1941年にフレー旗に戻ってきた。
- (13) 内モンゴル仏教協会の理事、フフホトの大召寺のダー・ラマである。

- (14) シレートとはモンゴル語であり、「法座」という意味である。ここでは、三大寺の最高の管理者を指す。
- (15) 市場から魚、ハトなどの生き物を買ひ、放す行事。
- (16) 民間の俗称である。観世音仙丹という。
- (17) 内モンゴル自治区の行政区画の一単位。
- (18) アンダイ踊りは、フレー旗地域で行われている最も有名な舞踊である。

参考文献

モンゴル語の文献

- Orgil 2012 *Küriy-e Košigü-n Deki Mongγolčud-un Šasin Sitolge-yin Odoki Baidal* Öbür Mongγol -un Yeke Surgagüli Mastorant-un Ügulel
- B・Süke 2010 *Andai-yin Notux Küriy-e Kusixu-nu Teüke Soyul-un Tobčiy-a* Öbür Mongγol -un Ündüsoten-u Yeke Surgagüli-yin Setgül
- Bayansang 2008 *Mongγol-un Borqan-u Šasin* Öbür Mongγol -un Ara-d-un Keblel-un Koriy-a
- Kürelša 1993 *Jirim-un Süm-e Keid* Öbür Mongγol -un Ara-d-un Keblel-un Koriy-a
2010 *Küriy-e Borqan -u Šasin-u Tobčiy-a* Öbür Mongγol -un Ara-d-un Keblel-un Koriy-a
- γandir 2011 *γanjuur Süm-e-yin Sergügelte-ba Odoki Neigem-deki Üiledül-ün Sodulul* Öbür Mongγol -un Yeke Surgagüli Mastorant-un Ügulel
- Čoyiji 1994 *Öbur Mongγol-un Süm-e Keid* Öbür Mongγol -un Ara-d-un Keblel-un Koriy-a
- Walther Heissig 1998 *Mongγol-un Šasin Surtaqun*, Altanbaγan-a Orčigolba (2016 訳) Öbür Mongγol -un Ara-d-un Keblel-un Koriy-a

日本語の文献

- 梅棹忠夫 1990 『梅棹忠夫著作集』第2巻『モンゴル研究』中央公論社
- 白莉莉 2015 「ラマ廟の社会的機能：宗教に関する聞き取り調査の活用」『国立民族博物館調査報告 130 巻』pp.81-110
- 嘉木揚凱朝 2004 『モンゴル仏教の研究』法蔵館
- 根敦阿斯爾 2011 「ラマ教寺院の年中行事－内モンゴル大召寺のマニ法会を対象に－」『比較民俗研究 25 号』pp.52-163
- 長尾雅人 1987 『蒙古ラマ廟記』中央公論社
- 長尾雅人 1992 『蒙古学問時』中央公論社
- 橋本光宝 1942 『蒙古の喇嘛教』仏教公論社

中国語の文献

- 德勒格、乌云高娃 2004 『内蒙古喇嘛教近現代史』遠方出版社
- 哈斯朝魯 2009 「庫倫旗現有寺廟歷史沿革与現狀調查」内蒙古民族大学学报
- 嘉木揚凱朝 2009 『中国蒙古族地区仏教文化』民族出版社
- 唐吉思 2010 『蒙古族仏教文化調查研究』遼寧民族出版社
- 張羽新 1988 『清政府与喇嘛教』西藏人民出版社